

(二〇二〇年度)

8 国 語 問 題 (九〇分)

(この問題冊子は19ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、マーク式の解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をついたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、記述式の解答は、各解答欄にいいに記入すること。
- 八、訂正する場合は、消しゴムでいいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 九、解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。
- 十、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「身あつてのこと」は、生命が大事ということであるが、生命をもっているのは自分であるから、「身」は「身」つから（みずから）を意味する（「身がまま」*etc.*）。自分はまた行為の主体であるから、倫理的責任の主体であり、社会的自己を内面化している。「身を責める」¹のは、他者とのかわりにおいて、倫理的主体としての身（自己）を責めるのであり、そこには他者性の契機がふくまれている。自己である（身）は、つねに他者とのかわりにおいてあるという多重帰属性ないし相互所属性を本質とする関係的存在であり、他者との関係でアイデンティティも確保される。

そこで（身）は、かならずしも個としての私に限定されず、関係的存在としての社会的自己を意味する。いまのべた（身）の多重帰属性は、（身）の人称としての流動性を生む。多重人格があるように、（身）は多重人称的である。「身が知ることか」では自称、「お身」では他称であり、「身身」では各人おのおのを意味する。「身内」は拡大した自己であり、血縁、地縁から、会社の同僚、国民、人類全体にまでひろがる。と同時に「身内」は、からだの中（ミウチ）というソクブツテキナ意味をもっている。他方、社会的自己は、つねに他者とのかわりにおいてあるから、他者との関係でまってくる私の立場、社会的地位、キヨウグウ、分限、分際といったものを意味する（「身のほど」*etc.*）。しかし「他者の立場になる」というのと、「人の身になる」というのでは、少なからずニュアンスが異なるであろう。「身になる」方が、より「親身」になり、「身を入れて」^B「考えている」と感じられるのである。

こうして人間は、もろもろの身のレベルを多様な仕方であえず統合しながら生きる全体存在として「身をたどる」、つまり身の処し方に応じてさまざまの仕方以身を統合するのである。してみれば結局「身」は、人間の全体存在にかかわる概念であるということができよう。しかしその全体は実体的統一ではない。「身」は、（他）とのかわりのなかで、多極分解する可能性についてにさらされた錯綜体²としてのあやうい統一である。

全体存在としての（身）は当然（「こころ」）のレベルを統合しているから、「身」は「こころ」をも意味する。「こころ」はそのゲンギ^C

らみても、「み」と根本的に対立したのではなく、活動する生き身のはたらきが凝り集まった中心であり、つねに此所である身の原点の在り処ところであろう。「身」の「身」は、情としてあふれ出る自分であり、「身に覚ゆ」というのは、はつきり心に意識することである。「身にしみる」は「心にしみる」ことであるが、「身を心」におきかえると、いくぶん意味がせまくなる。表面的意識的な感じが強くなり、深味にも、切実さにも欠けると感じられるであろう。「身にしみる」方が「心にしみる」よりも、より切実であり、事態やことばが、私の存在にしみとおる深さの感じもまさっている。人間存在の全体で痛切に感ずるといふニュアンスがよりよく表現されるのである。それは「身にしみる」という表現が、「心」のレベルのあり方に焦点をあてていながら、なお肉をふくめた「身」の網目の総体をその地平としているからこそ、そう感じられるのである。精神的な意味で「身にしみる」切実さは、身の傷口に水や薬がしみる切実さと切りはなすことができない。「示す」や「頭で知る」にたいして、より直接的で全人的な示し方、知り方を「身をもって示す」とか「身をもって知る」というのもそのためである。

これまで述べてきた「身」の諸相が、「常」の「身」であるとすれば、「稀」あるいは「奇」のあり方としての「身」ともいふべきものがある。「身変り」は、元来祭りの前の物忌のため、常人と異なつた状態となり、神事にあずかる資格ができることであるが、これを広くとれば、「常」の状態では潜在化している身（網様錯綜体）の根源的に異なつた形態化の可能性を示すことばとして使うことができる。「身」は、他者をふくめた世界とのかかわりにおいてある関係的存在であるが、そのかわりはさまざまのレベルでの拒否的な関係の可能性をもふくむものであり、またその統合は、多重人称性が暗示するような多極分解的な形態化の可能性をはらんでいる。「身」がこのようなあやうい存在であることを考えれば、いかなる人間にも「身変り」の可能性は存在するのである。比較的日常的な場面でのハレとケのあり方はもちろん、憑依ひきよをはじめとするいわゆる狂気の状態のあり方も、身が本来、世界とのかかわりの転換可能性をはらんだ不安定な動的統合であるかぎり、身の潜在的な統合ないし形態化の可能性として存在する。

自己組織化には、自己組織化の「図と地」あるいは「表と裏」ともいふべきものがあり、支配的・意識的な自己組織化の裏には、その逆相ともいふべき、補構造としての自己組織化や、可能態としての多極分解的なアモルフな形態化が潜在している。

これはさまざまの(身変り)においてあらわにされ、あるいは象徴的に表現されるであろう。順相と逆相、主構造と補構造というのは、支配的意識(常識的分節化)に中心化したとらえ方であるから、中心の移動や逆転が可能であり、両者を合わせて全体的人格を考えるとしても、その全体はたえず(他)へ脱出し、非全体化する可能性をはらんでいる。⁴ そのようなあやういあり方が、(身)の自己組織化の実態である。したがって自己組織化のさまざまなレベルと相に応じて、世界は多様な仕方方で(身分け)され、分節化される。つまり補構造として身分けされる世界の風景や、(身変り)において身分けされる世界の異相というものもあるわけだ。こうした多重的な意味発生が重層化し、記号や用具やもろもろの文化的産物を通じてそれらの意味が共有され、伝承されているのがわれわれが体験する現実世界である。

⁵ このように(身)は、肉から心までをふくみ生き身としての人間存在全体をあらわすことばである。しかもその統合は、たんなるハイアラーキー型の統合ではなく、他者はもちろん、人間以外をふくめた他の(身)との多岐的・多重的なかかわりのなかで生起する網目状の統合である。⁶ われわれは精神と物体の二元論というより、むしろ身心一如であり、かつ間柄であるような(身)のとらえ方において(身)を生き、(身)のあり方の相対的な差異相として、二次的に(身)と(心)を弁別しているといえよう。

^D むしろ「身」との関係で興味深いのは、「氣」の概念である。(身)がものの本体として、いわゆる物的なものから、心までをホウガンしているとすれば、(氣)は天地をみたすものとして、いわゆる物質的なものから、心までをおおっている。そして「氣」のかわりに「心」でおきかえることのできる表現もマイキヨ^Eにいとまがない(「氣が重い」etc.)。そしておきかえによって、意味のひろがりや深さが失われる点でも、両者は良く似かよっている。さきにあげた「天氣」がよくなると「氣分」が昂揚し、「氣が晴れる」という表現は、天地のあいだにみち、万物を生ずる根源である(氣)の特徴をよくあらわしている。「氣分」や「氣持」は、「超個人的な氣を、個人的な自己が分け持っている状態」(木村敏)といえよう。

(身)と(氣)は、ともに一つのカテゴリーにおさまりきらない多重性と、容易にレベルを移行する斜行性をもち、両者は(心)のあたりでオーバーラップしている。個々のものの本体である非人称的な(実)ないし(身)は、自己(み)として人称化され、主

観化されて、身のはたらきの「凝」りともいうべき「心」と相重なる意味をもつようになる。⁷ 他方、宇宙論的・非人称的な「気」も、個々の「身」に分有されて、主観的人称性をおび、いわば身とは反対の方向から、「心」に近い意味をもつにいたる。

そして「身」も「気」も、それぞれ少し違った角度からとはいえ、「心」にくらべると非人称性、自他未分性が強いが、大まかにいえば、「身」は凝縮的・局在的であり、「気」は拡散的・遍在的であるといえよう。「身」も「気」も相貌の特徴あるいは所作的意味によつてむすばれた類比的成層構造をなし、諸層を横切る移行によつて新しい相が生成する網目状の展開を示している。⁸ このような構造は二分性を基本とした樹状分枝図式によつては把握できないものであり、網状の交叉分枝図式を構成している。それは「身」の構造特性であるのみならず、自然言語や神話や問テキスト空間、また自然の都市や無意識的制度や絵体としての文化がもつ構造特性として、より一般的な意味をもっている。

(市川浩「身体の現象論」)

〔注〕アモルフ：無定形の状態。

ハイアラキー：ピラミッド型の階層制度。ヒエラルキー。

木村敏：一九三一。精神医学者。

問テキスト：一つのテキストに他のテキストが交錯していること。

問一 傍線部1について、「他者性の契機がふくまれている」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 「身を責める」ことは、他者に対して自分がよくないことを認めることであるから、自他ともに他者あつての自己であるという認識をもつきっかけとなる、ということ。
- b 「身を責める」ことは、自己が社会的に倫理的責任をとることを自覚することであるから、自分が社会的自己であることに目覚めるきっかけとなる、ということ。
- c 「身を責める」ことは、他者に対して自分の落ち度を反省する行為であるから、自分が他者の存在のかけがえのなさを自覚するきっかけになる、ということ。
- d 「身を責める」ことは、自己が倫理的主体として他者に対する責任をとることであるから、社会的自己を内面化するきっかけになる、ということ。

問二 傍線部2について、「身」は、人間の全体存在にかかわる概念である」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 「身」は、「他者の立場になる」ことで社会的自己を形成しつつ錯綜体として生きる存在であるということ。
- b 「身」は、実体的統一を目指すのではなく錯綜体としての統一を目指して生きる存在であるということ。
- c 「身」は、多様な仕方でつねにいろいろな身を統合しながら生きる存在であるということ。
- d 「身」は、〈他〉とのかかわりのなかで多極分解をくいとめながら統一体として生きる存在であるということ。

問三 傍線部3について、「身変り」が、「(常)の状態では潜在化している身(網様錯綜体)の根源的に異なった形態化の可能性を示すことばとして使うことができる」のは、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 身が、もともと(稀)あるいは(奇)のあり方とは別のレベルにおいて存在しているから。
- b 身が、そもそも世界との関係においてさまざまな転換の可能性をもったあやうい存在であるから。
- c 身が、はじめから多極分解的な形態化を乗り越えて統合を成立させてきたから。
- d 身が、元来他者との関係において拒否的關係の可能性を排除することで存在してきたから。

問四 傍線部4について、「そのようなあやういあり方」とは、どういうあり方なのか。該当しないものを、次の中から一つ選べ。

- a 自己組織化は、主構造と補構造から成り、そのとらえ方によっては主構造と補構造が逆転するあり方。
- b 自己組織化は、順相と逆相から成り、順相に力点を置けばその反動として逆相が浮上するあり方。
- c 自己組織化は、支配的・意識的な自己組織化の裏に多極分解的なものが存在しているあり方。
- d 自己組織化は、全体的人格を考えると全体が(他)へ脱出して非全体化してしまうあり方。

問五 傍線部5は、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 〈身〉は、物理的身体レベルのことよりも精神的なレベルのことを優先させた生身なまみの存在だ、という意味のことばである。

b 〈身〉は、物理的な身体と精神的な心が一体化した、日常生活で使用するからだである、という意味のことばである。

c 〈身〉は、物体としての身体と精神としての心をもつ生きているからだである、という意味のことばである。

d 〈身〉は、物理的な機能としての身体と精神的機能としての心が互いに排除しあっている生身なまみの存在だ、という意味のことばである。

問六 傍線部6について、「〈身〉のあり方の相対的な差異相として、二次的に〈身〉と〈心〉を弁別している」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 人間は、網目状の統合をもつて生きており、〈身〉のあり方からして〈身〉と〈心〉の差異には気づきづらい。

b 人間は、生き身として存在するものであり、〈身〉のあり方からして〈身〉と〈心〉に分けるのはまちがった認識ではない。

c 人間は、身と心とが統合された存在であり、〈身〉のあり方を見て〈身〉と〈心〉を区別しても意味はない。

d 人間は、意識せずに身心一如を生きており、〈身〉のあり方を見てはじめて〈身〉と〈心〉の存在に気づくのである。

問七 傍線部7について、「個々の〈身〉に分有されて」に該当するものを、次の中から一つ選べ。

- a 〈気〉は、天地をみたすものとして〈身〉をおおうことにより個人に侵入してくる。
- b 「気分」という言葉は、〈気〉が個人的な自己に取り込まれた状態を表している。
- c 〈気〉は、万物を生ずる根源として個人のかなに潜在している。
- d 「気持」という言葉は、〈気〉が個人的な自己を変革させた状態を表している。

問八 傍線部8について、「このような構造」とは、どういう構造か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 支配的・意識的な自己組織化の裏には、その逆相ともいべき、補構造としての自己組織化や、可能態としての多極分解的なアモルフな形態化が潜在している構造。
- b 多重的な意味発生が重層化し、記号や用具やもろもろの文化的産物を通じてそれらの意味が共有され、伝承されている構造。
- c ハイアラキー型の統合ではなく、他者はもちろん、人間以外をふくめた他の〈身〉との多岐的・多重的なかわりななかで生起する網目状の統合である構造。
- d 自己組織化のさまざまなレベルと相に応じて、世界は多様な仕方で〈身分け〉され、分節化される構造。

問九 波線部Iについて、「〈身〉の人称としての流動性」とは、どういうことを言っているのか。わかりやすく説明せよ。

問十 波線部IIについて、「「身」を「心」におきかえると、いくぶん意味がせまくなる」のは、なぜか。その理由をわかりやすく説明せよ。

問十一 二重傍線部 A ～ E のカタカナを、それぞれ字画正しい漢字に直せ。

二

次の文章は、仲忠が妻の女一宮に、娘のいぬ宮のことで相談をしている場面である。これを読んで後の問に答えよ。

(仲忠)「いぬ宮などを、おろかに¹ 思²したるにこそ侍るめれ。まだ這³ひぬざりたまひし時⁴だに、この琴を見たまひては、いと弾かまほしうしたまひき。この年ごろは、月日もとく過ぎなむ。ものの心も知りたまはば、心静かにて、さるべからむ所を造りて、率てたてまつりて、習はしたてまつらむと、夜は目を覚まし、昼はこれを思ひ巡らしはべるに、本意のごと静かなるべいことの難かべいをなむ、いかさまにせまし、と思ひはべる。来年は七つになりたまふ。今までこれを教へたてまつらぬこと。尚侍のおとどは、四つよりこそ弾きたまひけれ。御袴のこと急ぎはべりしに、ことにもあらざりけり」と嘆ききこえたまへば、「げに身にも思ふことなり。さしもあらぬ人々にだにこそあれ、世の常ならむは、いとこそかひなかるべけれ。そこそこ、え静かにもものしたまはざめれ。尚侍のおとどこそは」このたまへば、「一人離れても、えおはせじ。また下れる弟子よりこそ習ひたまふべけれ。むかしの朝臣は、七人の山人の中の劣りの手よりこそ、すぐれたる極まりの手をば弾き取りたまひけれ。仲忠が弾きはべるを、院の上などは、よしと仰せらるれど、尚侍のおとど同じくしたまへども、思ほえずこそ侍れ。かの弾きたまふ時は、故治部卿、いかに弾きたまひけむとこそ、むかし恋しく思ひやられ侍れ。尚侍のおとどは、いかがは。一ところにおはして、まづ仲忠が覚えむ限りをこそは習はしたてまつらめ。春は、霞、ほのかなる」A の声、花の匂ひを思ひやり、夏の初め、深き夜の B の声、暁の空の気色、林の中を思ひやり、秋の時雨、夜明らかなる月、思ひ思ひの C の声、風の音、色々の紅葉の枝を別るる折の気色を思ひ、冬の空、定めなき雲、鳥、獣の気色の、朝の雪の庭を眺め、高き山の頂を思ひやり、凍みたる池の下の水をあはれび、深き心、高き思ひも、もろもろのことを思ひ合わせ、世の中のすべて、千種にありと見ゆる物の、覚ゆる物、また時に従ひつつ、色衰へ、久しくなり、またむなしくなりぬるものを心に思ひ続けて、琴の音に弾き添へむと、思ひ同じくて弾きはべればこそ、琴の音、思ひ思ひに従ひて響き、よろづの折には合ひはべれ。あそばすやうに、ただ弾きにやは弾くものならむ」と聞こえたまへば、宮、いとあはれに、おろかならむ心を思ひて弾き鳴らすべきことにはあらざりけりと、恥づかしく聞きたまふ。

〔うつほ物語〕

〈注〉○静かなるべいことの難かべい…べいは「べき」のイ音便。○尚侍のおとど…仲忠の母。○御袴のこと…袴着。初め
て袴をつける儀式のこと。○むかしの朝臣…仲忠の祖父。「故治部卿」も同じ。

問一 傍線部1「おろかに」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 尋常でなく
- b ばかげていると
- c いい加減に
- d 未成熟だと

問二 波線部ア～エのうち、敬意の対象が他の三つと異なるものを次の中から一つ選べ。

- a ア
- b イ
- c ウ
- d エ

問三 二重傍線部Pと同じ語を二重傍線部Q～Tのうちから一つ選べ。

- a Q
- b R
- c S
- d T

問四 傍線部2「ことにもあらざりけり」とあるが、なぜか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 女一宮は袴着ばかりを重視し、いぬ宮に琴の演奏法を伝授することは不要に感じていたから。
- b いぬ宮に琴の演奏法を伝授するために、一刻も早く袴着を終わらせる必要があるから。
- c 準備していたいぬ宮の袴着より、いぬ宮へ琴の演奏法を伝授する方が重要であったから。
- d 尚侍のおとどがかつて袴着よりも先に琴を伝授されていたことを思い出したから。

問五 傍線部3「尚侍のおとどこそは」とあるが、なぜか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 仲忠は忙しくて落ち着いて琴を教えられないだろうから。
- b 尚侍のおとどの方が仲忠より琴の演奏家として優れているから。
- c 尚侍のおとどの屋敷が、静かで琴を教える場所にふさわしいから。
- d 尚侍のおとどより仲忠が琴を教えるべきだと考えているから。

問六 傍線部4「また下れる弟子よりこそ習ひたまふべけれ」とあるが、どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a むかしの朝臣、尚侍のおとどと琴が伝授され、最後に伝授された仲忠から琴は習うべきだということ。
- b むかしの朝臣、尚侍のおとどに比べて琴の演奏の劣っている仲忠からこそ琴は習うべきだということ。
- c 尚侍のおとどや仲忠からより、本当は天から下った天女から琴を習う方がよいということ。
- d 尚侍のおとどや仲忠ではなく、仲忠の弟子から琴を習った方がよいということ。

問七 傍線部5について、次の問に答えよ。

(1) 空欄A～Cに当てはまる言葉の組み合わせとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- | | | | | | | | |
|---|------|---------------------|----------------------|---|------|------|-----|
| a | A…虫 | B…鶯 ^{うぐいす} | C…時鳥 ^{トキトリ} | b | A…虫 | B…時鳥 | C…鶯 |
| c | A…鶯 | B…虫 | C…時鳥 | d | A…鶯 | B…時鳥 | C…虫 |
| e | A…時鳥 | B…虫 | C…鶯 | f | A…時鳥 | B…鶯 | C…虫 |

(2) ここでは何が示されているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 仲忠の幼少期の個人的体験
- b 昨年一年間の過ごした日々
- c 四季ごとにどのような自然があるか考えること
- d 四季折々の自然の情趣を感じることに

問八 傍線部6「恥づかしく聞きたまふ」とあるが、なぜか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 女一宮は仲忠の琴に対する熱弁を聞いて、仲忠が立派だと思ったから。
- b 女一宮はいぬ宮の教育方針について仲忠に厳しく叱責されたから。
- c 女一宮はこれまで琴の演奏の本質も知らず適当に琴を弾いてきたから。
- d 女一宮は自分よりはるかにいぬ宮の事を考えてくれている仲忠に感動したから。

問九 破線部X「世の常ならむ」とはどういうことか、説明せよ。

問十 破線部Yについて、「同じく」が、何と何を「同じ」に（一体化）するのかを明らかにした上で、琴はどのような演奏がよいと言っているか説明せよ。

問十一 破線部Z「あそばすやうに」を動作の主体、動作の内容を明らかにして現代語訳せよ。

三

次の文章は、晋の智伯が韓・魏とともに趙に攻め込み、その本拠地・晋陽を水攻めにした場面である。これを読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

襄子謂張孟談曰、「糧食匱、財力尽、士大夫病。吾不能守矣。欲

以城下、何如」。張孟談曰、「臣聞之、亡不能存、危不能安、則無

為貴知士也。君積此計、勿復言也。臣請見韓・魏之君」。

襄子曰、「諾」。張孟談、於是陰見韓・魏之君曰、「臣聞、

唇亡則齒寒。今智伯帥二国之君伐趙、趙將亡矣。亡則二君

為之次矣」。二君曰、「我知其然。夫智伯為人、麤中而少親。

我謀未遂而知、則其禍必至。為之奈何」。張孟談曰、「謀出二

君之口、入臣之耳。人莫之知也」。二君即与張孟談陰約三軍、

与之期曰、「夜遣入晋陽」。張孟談以報襄子。襄子再拜之。

張孟談 因朝^{ツテ}智伯^ニ而出^デ、遇^フ智過^ニ轅門^ニ之外^ニ。智過^ニ入^{リテ}見^テ智伯^{曰ク}、
 「主^F殆^ク將^ク有^ク變^ト」。君^{曰ク}、「何^ト如^ト」。對^{ヘテク}曰^ク、「臣^ニ遇^フ張孟談^ニ於^テ轅門^ニ之外^ニ、
 其^ノ志^ハ矜^{ホコリ}、其^ノ行^ハ高^{シト}」。

〔戰国策〕

〔注〕○襄子…趙の君主。 ○張孟談…趙の臣。 ○麴中…心中粗暴であること。 ○三軍…全軍。 ○智過…智伯の臣。
 ○轅門…陣營の門。

問一 傍線部「亡不能存、危不能安」とはどういう意味か。次の中からもつとも適切なものをつつ選べ。

- a 亡びかけた国は存続することができず、危うい国は安定を取り戻すことができないので
- b 国は存続させなければならず、危機からは抜け出さねばならないと考えるならば
- c 国を存続させることは不可能ではなく、危機を救うことも難しいことではないので
- d 亡びかけた国を存続させ、危うい国に安定を取り戻すことができないならば

問二 傍線部2「陰」と同じ意味で「陰」の字が用いられている語はどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 陰陽
- b 陰徳
- c 陰影
- d 陰湿

問三 傍線部3「唇亡」則齒寒」とはどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 隣接した国同士は、同様の危機に直面していると知るべきだということ。
- b 大切なはかりごとをうっかり口にすると命が危ないということ。
- c ある国が敗れると、その周辺の国にも危難が及ぶ、ということ。
- d 君主に直言できる臣下がいなくなると、その国は危ういということ。

問四 『戦国策』の説明として正しいものを、次の中から一つ選べ。

- a 諸子の一つ、縦横家の活躍がしばしば描かれている。
- b 孔子が生きていた時代の歴史を記した作品である。
- c 戦国の争いをいかに治めるべきかを説いた書である。
- d 兵法家として有名な孫子が著したと伝えられている。

問五 波線部 A「見」、B「為人」の、本文中における読みをひらがなで答えよ。

問六 波線部 C「未遂而知」を現代語訳せよ。

問七 波線部 D「為之奈何」の書き下し文をひらがなで記せ。

問八 波線部 E「人莫之知也」に返り点・送り仮名を施せ。

問九 波線部 F「二主殆将有変」と考えたのはなぜか。説明せよ。

